

## 下水道と地域の市民活動の研究集会を開催 <21世紀水倶楽部>

### 清瀬市、川崎市の市民団体がプレゼン

NPO法人21世紀水倶楽部（大迫健一理事長）は4月24日、東京・新宿区の（財）下水道新技術推進機構において、地域で活躍する市民団体が活動している人たち等をプレゼンターとして招き、「下水道事業と地域活動」と題する研究集会を開催した。

この研究集会は、下水道事業が建設から維持管理に移行していく中で、都市の重要な水環境施設であるという一般市民の下水道に対する認識が薄くなりつつある現状を踏まえ、先進都市の取り組みや、地域の市民団体の活動を紹介し、さらに地域市民と下水道事業との連携のあり方などを議論して、今後の下水道事業の参考にしてもらうことを目的に開催されたもの。

研究集会は、第一部の千葉市と横須賀市による事例報告、第二部の東京都清瀬市と川崎市それぞれの市民団体によるプレゼンテーション・参加者を交えた討論、の二部構成で行われ、第二部の討論では総勢約40名の参加者により活発な議論が繰り広げられた。

### 千葉市、横須賀市の地域活動

第一部では、まず千葉市下水道局の土屋潔建設部長と千葉市の服部洵エコリーダーが「市民協働による水辺づくり」と題し、千葉県住宅供給公社が開発した、居住者1万人を抱えるこてはし台団地に隣接するこてはし台調整池での、市民との協働による水辺づくりについての事例を報告した。

土屋部長は、昭和30年代以降の急激な都市化の進展を背景に、下水道整備に邁進し効果を上げてきたものの、河川水量が減少し、湧水等の水源が消失、それとともに生物生息空間も消失してきた千葉市の現状に触れた後、地域のニーズに沿って行政と市民の協働による「千葉市水辺再生基本プラン」（平成15年5月）策定の経緯を述べた。こてはし台調整池水辺づくりはこのプランに基づき、千葉大

学、地元自治会、地元小学校、千葉市下水道局の4者で構成される「こてはし台調整池水辺づくり協議会」で進められているもので、同協議会で施設内容や安全管理、地元ニーズ、完成後の維持管理などを議論し、その議論をもとに、地元小学生を招いての現地見学会を開催し、子どもたちの夢を聞き、子どもたちに描いてもらった水辺に対する夢の絵をもとに水コンサルタントが設計、工事に着手し、今年度第2期工事が完成、来年度一般開放される。

また、この水辺づくりの中で重要な役割を担っているのが、私財を投じて建設地の中にビオトープを整備した服部エコリーダーだ。土屋部長に続いて報告に立った服部エコリーダーは、千葉市の広報紙を通じてエコリーダー制度を知り一定の勉強を経て資格を取得。同市下水道局と相談して同地の一部使用許可を得て「野鳥の水飲み場および小動物の生息系確保」を目的としてビオトープづくりを行うようになった経緯を説明し、「水辺づくりは、地域への大きな贈り物になっている。地域住民は毎日、水辺づくりの工事を観察している」と現状を伝えた。

次に、横須賀市上下水道局施設部の森山清水再生課長が「トンボの王国について」と題し、下町浄化センターと追浜浄化センターの2つの「トンボの王国」の現状と課題について報告した。2つの「トンボの王国」は、市民の目で見て楽しむことができる施設として、トンボ池やメダカの小川、遊歩道等を整備したもので、いずれも国土交通省の「甦る水100選」を受賞。このうち下町浄化センターについては、平成16年の改正ビル管理法施行の影響や、三浦半島固有のミウラメダカ等が生息する「メダカの小川」で予期しなかったサギによるメダカの捕食、子どもが放したザリガニの増加などの現状を、また、周囲が工場で二重覆蓋化した上部空間に「トンボの王国」を整備した追浜

浄化センターでは、トンボは増えたものの、3、4羽のカモの棲みつき、ザリガニの増加などの現状を紹介した。さらに、追浜浄化センターでは、工業用水の水源が近場がないことから、隣接する東京ガス横須賀パワーへの工業用水を供給していることを述べ、「フードマイレージ」の概念が定着しつつあるが、水についても同じような考え方ができるのではないかと指摘し、再生水を資源として活用していく上で、「再生水利用のニーズを知る必要がある」と結んだ。

### 市民の目から見た下水道

第二部では、東京都清瀬市で活動している「清瀬下宿ビオトープ公園を育む会」の田中くに子氏と望月基子氏、および川崎市の江川流域で活動している「森とせせらぎネットワーク」の河野健三氏がそれぞれの活動内容を紹介するプレゼンテーションを行った。

この中で「清瀬下宿ビオトープ公園を育む会」の田中氏・望月氏は、地下水や下水処理水を利用したビオトープ公園を建設する経緯とともに、子どもたちと一緒にメダカやモツゴ等を放流した経験、ギンヤンマや蝶、ヘビ、カエル、カルガモ等が生息し、現在はハスの植栽を行っているという現状を伝え、さらに清瀬水再生センター職員2名、市職員2名、ボランティア8名による年3回の除草作業など維持管理作業の状況などを報告した。

また、「森とせせらぎネットワーク」の河野氏は、1970年代から進展した都市化による江川の汚染や、その対策として85年に策定された地下45m、φ8.5mの貯留管を布設する「アクアプロムナード計画」、90年頃から始まった流域の市民による地域活動、2003年にせせらぎ遊歩道等の工事が完了し、水に親しむ8つのゾーンを設置し、カルガモやコサギ、カワウ等の動物、コイ、メダカ等の魚類が豊かに生息する現状とともに、年4回の水を抜いて清掃作業を行うことからコイが傷つき、コイヘルペスの問題が発生した経験、地域のふれあい活動として流域の市民が協力して開催した「せせらぎ祭」などを紹介した。

この後、21世紀水倶楽部理事で下水道機構新技術研究所の栗原秀人所長をコーディネーターとして、講演者を交えた参加者全員による討論が行われた。主に討論のテーマとなったのは、●下水道は市民に見えているのか、●下水道で何ができるのか、●下水道はどうしたら市民と一緒に活動できるのか、活動を続けられるのか、●これからどう活動するのかといったことだが、ユスリカやザリガニなど、具体的な問題についても話し合われた。

この討論で興味深い発言を紹介すると、「せせらぎ遊歩道の整備にあたっては、川崎市の職員がマメに足を運んでくれ、設計の中に我々（市民）の気持ちを反映してくれたほか、水質依頼検査についても一所懸命取り組んでくれた。お互いキャッチボールできる関係が構築されていた」「下水道は囲われている空間で、自由に入っていけないという雰囲気がない」「下水処理場（清瀬水再生センター）の職員と一緒に汗を流す。そこから良いアイデアが出てくる」「ビオトープの見学にはリピーターが多く、とても楽しみにしているようだ。市民祭には清瀬水再生センターでも積極的に参加している」「地域活動の根本は組織ではなく人である。ゴミ拾いなど一緒に行くことで、その人の顔が見えてくる。行政は時間外の土日に、いかに市民と活動できるかが問題となるのでは」「千葉市における市民との協働は始まったばかりで、本格的にはこれから。財政的には厳しい状態だが、市民の要望も多く、市長はとても良いことだとして奨めている。今後は市民と維持管理をどう進めていくかだ」「水辺は人間だけのものではない」——等々。

最後に、栗原理事が討論内容を総括し、「キーワードは、情報発信、下水道の機能・役割、潜在能力、見せる、近づける、場の提供等である。地域活動が情報交換と情報発信の場となる」と締め括った。

今回の研究集会は、下水道と市民との交流の実態を知る機会として非常に有意義なものとなった。その中で大きな課題と見られるのは、市民と行政との接点を作る手法であり、関係の持続性であるとの印象を得た。下水道は市民のための施設だが、全国的には市民からはまだまだ遠いところにあるようだ。